

ファースト・コンタクトにおける 政治的対応の考察

京都大学大学院 文学研究科
研究員 大庭弘継

「UFO」に関する近年の政治的言動

- イギリス: 2009年にUFO対応部署を廃止
- 日本: 国会議員の質問、石破防衛大臣(当時)の発言、町村官房長官(当時)の発言
- 米国: クリントン候補発言、ホワイトハウスの反応

⇒ 政治的問題とは考えられていない

⇒ たぶん皆さんの第一印象と同じく、「冗談半分な話題」として政治的には扱われている。

⇒ しかし、仮にUFOが到来した場合、またはETIの電波の探知であっても、人類の生存にかかわる懸念がある。よって、思考実験をつづじた準備は有益である。

もしコンタクトしたならば

- 重大な政治的問題→ただし、政治学は有効なツールを持たず。
 - 政治学(国際政治学)は、人間の行動原理と人間同士の相互作用を探る学問の一つ。ETとの相互作用はそもそも対象外。
 - 実際に「交流」が開始されたのちは、ある程度、政治学の知見を反映させることが可能かもしれない。
 - 政治学も「事実」をベースに政策を検討するが、「事実」を確定させる科学者の意見の分断も予想される。
- 政治的対応を可能にするためには、まず「事実」を確定させるための政治的対応が必要不可欠となる。
- ⇒そこで、具体的なアクションの第一段階として、「情勢判断」
- ⇒そのために、様々な専門分野の研究者が主体となる新組織(「国連地球外生命体探査機関」などの名称?)

研究者による国際組織

- キャッチしたわずかな電波情報だけであっても、科学的に推論を重ね、「妥当な事実」を判定集約し説明する、つまり情勢判断を行う、研究者で構成される国際的新組織の創設
 - ※IPCC(気候変動に関する政府間パネル):温暖化問題に対応する組織。事実上、世界中の科学者が協力して(科学的根拠、影響・適応・脆弱性、緩和策といった作業部会)、科学的知見を集成評価(可能性と確信度)し、報告書を公表(観測事実、温暖化の要因、将来予測)。
- 予想される任務:探知電波の性質・用途の解明、電波発信元の解明、コミュニケーションの可否、予想される技術、文化等の情報収集、異星人の生態の想像、脅威の識別(後述)etc

研究者が直面するリスク

- 当該組織と所属する研究者は、困難とリスクにさらされる。
 - 気候変動以上に、入手できるソースが限定。その一方で、言語学者や文化人類学者などの文系研究者、政治家や官僚など、従来以上に異分野との協働が増加。協働以前に、「文化」の刷り合わせが必要。
 - 「情勢判断」への批判と責任追及のリスク
 - イギリスのBSE問題(1996):「信頼の危機」
 - IPCCへのデータ「捏造疑惑」批判(Climategate事件; 2009)
 - イタリアの地震(2009)の「予知」失敗と地震学者への一審有罪
 - ファースト・コンタクト以前に、様々なリスクに直面する。

研究者の任務としての脅威判定

- ETIは地球に対して脅威か否か？ETIは地球を訪問する意思と能力を有するのか？友好的か、敵対的か、無関心か？「友好的」であっても、人類を意図せず／意識せず抹殺するかもしれない・・・。
- こういった脅威判定は、研究者の知見によるしかない。
- 安全保障で一般的に、脅威とは意図×能力。だが、それぞれの要素は、伸縮自在。さらに、一般的な安全保障の問題と異なり、相手に関するほとんどの情報は存在しない。

⇒ 数少ない「研究」である、Taylor & Boanによる

Alien Invasion : the Ultimate Survival Guide for Ultimate Attack(Bean Publishing Enterprises : 2011)を参考に、「意図」と「能力」、「意思決定フローチャート」を検討

能力の判定？

- 宇宙文明の尺度として提案されたカルダシェフ・スケールは、使用するエネルギー量に着目。エネルギーの効率的活用を含めていない。
- Taylor & Boanは、距離の防壁を凌駕する移動能力(ワープ能力)に注目

	$\alpha_0 \sim 0.1$
銀河の横断に要する時間	400,000年以上
ETの行動形態	Solar System Explorers

絶対ありえないとまでは言わないが、多くの科学者が前提とする物理法則に反するものである。可能性が低いという理由に加えて、科学者が想定できない事例を、無理に想定しろというのは難しい。よって、ここでは除外する。だが可能性はゼロに近くても、ゼロではないことに留意する必要がある。

$v = \alpha c$ 、 c =光速、 α =ワープ能力、Taylor & Boan, p.37

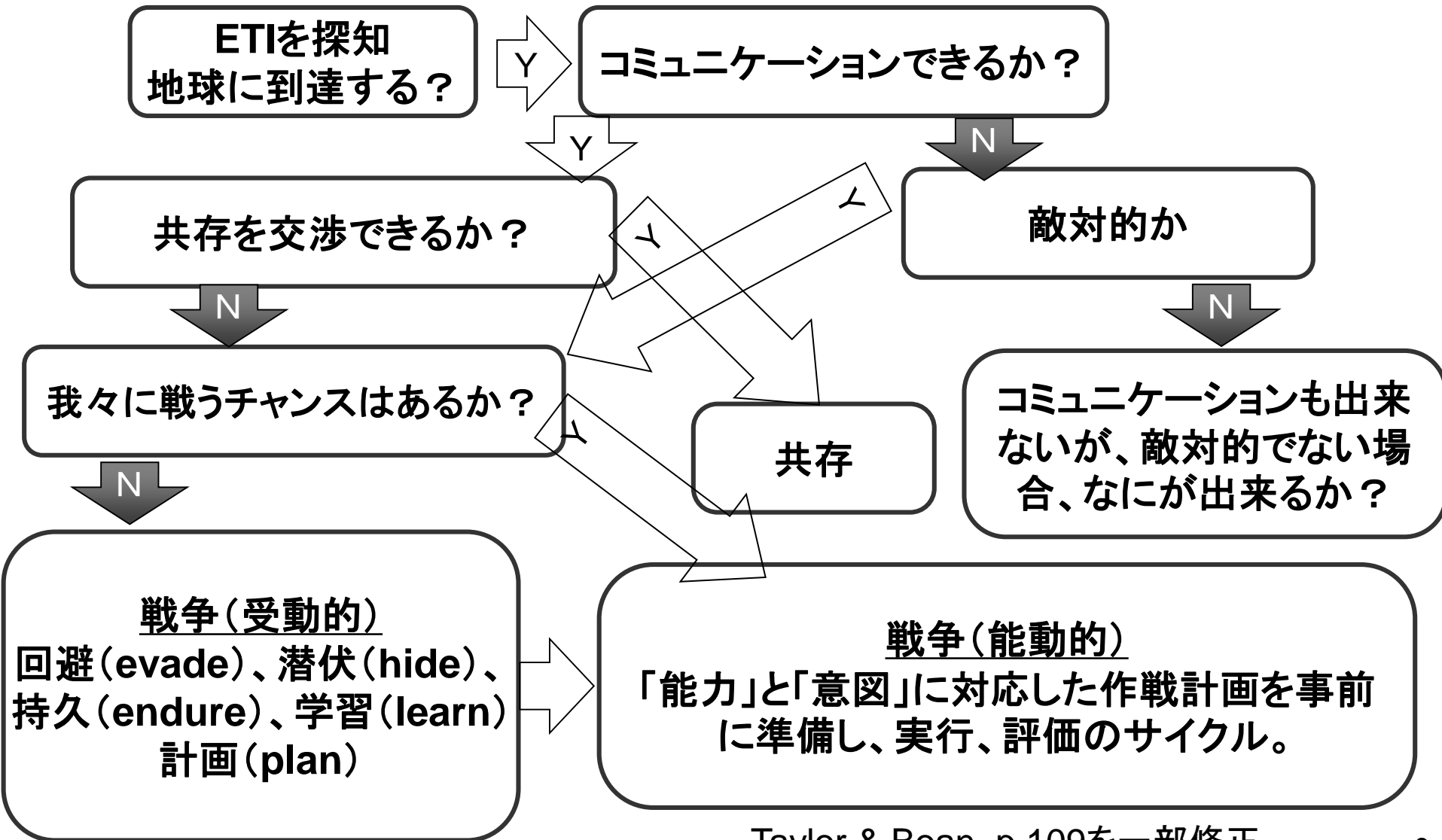
- 移動能力(ワープ能力を除く)の判定は重要な情報で、ETIの生態も推測可能かもしれない。だが、他の技術も軽視できない。「能力」の評価要素は、知見の増加とともに、さらに精緻化する必要がある。

意図の判定？

- SFをもとにしたTaylor & Boan (p.121)による意図の類型は右図。但し、例の多くがハリウッドの扇情的映画で、著名なSF小説も欠けており、人類に対する態度が単純。
- 「意図」という観点に、(人類・地球に対する)「関心」と「特徴・傾向」を含めるよう、更なる検討が必要。
- 「関心」: 敵意。無関心。無関心、ときに害意。無邪気な善意。配慮した善意。パターンリズムな干渉主義。非干渉主義。劣等生物扱い。鑑賞動物。実験材料。
- 「特徴・傾向」: 武器使用など

エイリアンのタイプ	レベル	SFの例
破壊(Destructors)	$\alpha_1 \sim \alpha_3$	マースアタック
征服(Conquers)	$\alpha_1 \sim \alpha_3$	クリンゴン
採掘(Strip Miners)	$\alpha_1 \sim \alpha_3$	インディペンデンス・デイ
収穫(Harvesters)	$\alpha_1 \sim \alpha_3$	V
狩猟、収集(Hunters, Collectors)	$\alpha_1 \sim \alpha_3$	プレデター
同化(Assimilators)	$\alpha_1 \sim \alpha_4$	ホーク
反乱軍、偶然(Opposing Warriors, Happenstance)	$\alpha_2 \sim \alpha_4$	ロボテック
旅行(tourists)	$\alpha_0 \sim \alpha_3$	メンインブラック
干渉(Meddlers)	$\alpha_3 \sim \alpha_5$	ゼイリブ,
移動(Movers)	$\alpha_0 \sim \alpha_3$	
人体実験(Experimenters)	$\alpha_2 \sim \alpha_5$	グレイ
(社会)実験(Experiments)	$\alpha_0 \sim \alpha_5$	スピーシーズ
テラフォーム(Terraformers)	$\alpha_3 \sim \alpha_4$	フォン・ノイマンの戦争
意図不明(Motivation Unknown)	$\alpha_0 \sim \alpha_5$	

ファースト・コンタクト・プロトコール



もし戦争になったらなら

- ETIは人類より遥かに進んだ技術を持つと想定されるため、非対称戦争 (asymmetric war)となる。(いきなり人類を滅亡させるシナリオも想像可能。)
- 仮に、『インディペンデンス・デイ』等の想定において、人類側がとりうるのは、ゲリラ戦術。ただし、一般的なゲリラ戦術は人民の海に隠れることで強さを発揮できる。人類は、地形、地下、水中を利用して、対抗するものと想定される。
- 勝利したとしても被害は甚大となる可能性。なお、米国が敗北したといわれるベトナム戦争では、「敗北した」米国の死者が約5万に対し、「勝利した」北ベトナムは兵員約100万人、民間人約300万人(南を含まず)の犠牲者(諸説あり)

人類は団結できるのか？

侵略者	政府	人々
<ul style="list-style-type: none">・敵対的プレデタータイプ (Hostile Predator type)・親切な冒険者 (Benign Explorer)・神のようなもの (Godlike)	<ul style="list-style-type: none">・侵略への準備・無防備 (Unprepared)・あけすけな敵意 (Openly Hostile)・ひそかな敵意 (Secretly Hostile)・侵略者への加担 (Sides with Invader)	<ul style="list-style-type: none">・脅威への無知 (Not aware of threat)・無関心 (Apathetic)・侵略者への共感 (Sympathetic to invader)・ヒステリー (Hysterical)・侵略者への敵意 (Hostile to invader)・侵略者を崇拜 (Worship invader)

Taylor & Boan, p.111

- ・ はたして人類は団結できるのか？そもそも団結する必要があるのか？
- ・ 小松左京『見知らぬ明日』(1968)では、冷戦期の東西対立を背景に、宇宙人の侵略に対抗できない人類の混乱を描いている。
- ・ 実際、IPCCの活動にもかかわらず、温暖化対策は足踏み状態。
- ・ ETIの脅威は、人類内部の抗争を惹起する可能性がある。



まとめ

- 現状、ETI(UFO)は現実的な政治課題ではない。
- ファーストコンタクトに際して、研究者の国際組織が誕生。
- 研究者(と国際組織)はリスクを背負う。
- 組織の主要任務の一つは、脅威の判定である。
- 移動能力を能力判定の中心とするが、知見の蓄積とともにその他の能力も追加していく。
- 侵略、採掘、旅行などのETIの意図を分類したうえで、関心などの要素を加えてさらに精緻化する。
- ETIとの戦争は、非対称戦争となる。
- 人類の団結も、確実とは言えない。